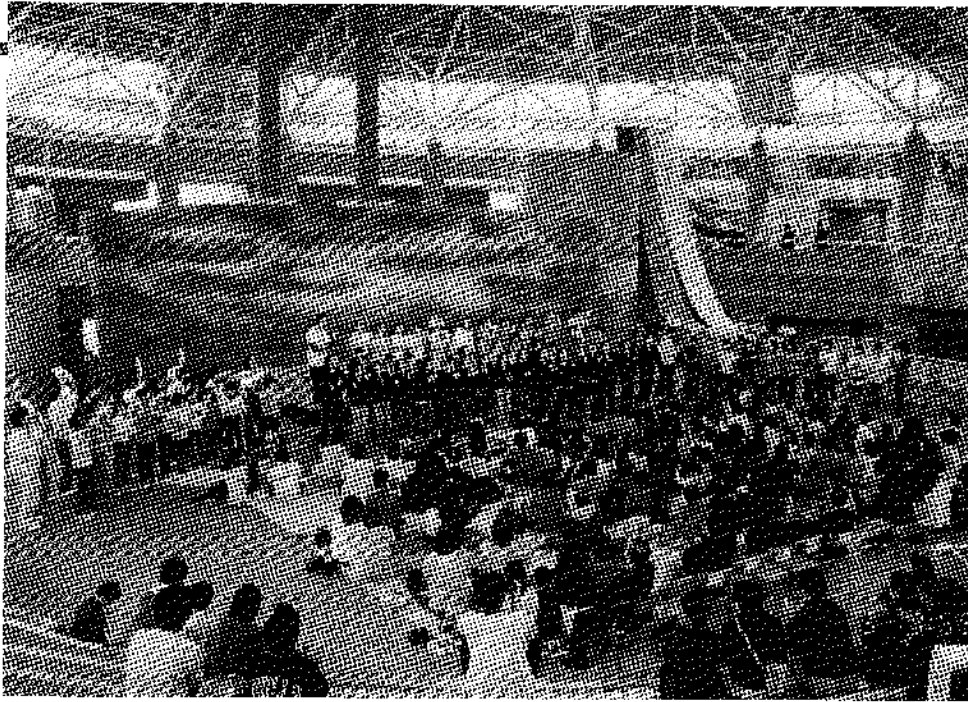


「劇あそび」が「うっぱうっぱ」

全国児童館連合会事務局次長
依田 秀任

昨年12月5日、滋賀県立びわ湖こどもの国にて「第19回キリン・劇あそびフェスティバル」（以下「劇フェス」）を開催しました。今回は、お客さん250名、出演者90名、その他関係者をあわせ400名ほどの参加がありました。そこで、この報告の機会にあらためて「劇あそび」を考えてみたいと思います。



▲400人の心が1つになったエンディング！

「劇あそび」って何？

「劇あそび」は子どもたちの表現力や想像力を育て、感動を体験する健全育成活動です。「うっぱうっぱ」や「うそっこ」「まねっこ」など、子どもたちの日常生活の中の何気ない遊びがベースと言えます。ちょっとした課題や演出を加えながら、文化的な高まりやドラマチックな世界をつくりだしていくことに「劇あそび」の醍醐味があります。ゲーム遊びのような活動的なものから音楽や演劇のような芸術的なものまで、その内容は多様です。イメージを共有しながら楽しむ遊びは、いわば何だっ「劇あそび」と言えるでしょう。

自由な雰囲気のある児童館こそ

大人配給型の活動はそこかしこにあります。白発的で積極的な自己表現の場がどれだけ子どもに担保されているでしょう。自由な雰囲気があり、子どもの素の姿がある児童館こそ「劇あそび」的環境であり、全児連が

20年ほど前から提案し続けている所以です。仮に拘束感のある窮屈な児童館があるならばお勧めできません。完成度を追求するがばかり息の詰まるような練習を強いることは、もはや遊びの範ちゆうにないからです。何かがある方法で誰かに伝える楽しさや喜びを体験するとともに、コミュニケーション能力を高める「劇あそび」は、健全育成ツールとしますます大切なものとなることでしょう。

フェスティバルのつくり方

劇フェスは、当初主に教育や演劇専攻の学生たちがプログラムを開発し、児童館の現場に啓発することが中心でした。近年では各地域の児童館職員や子どもたち、おかあさんやボランティアの人たちの日常的な活動として取り組まれ、その成果を持ち寄る形態になっていきます。ともすれば単発のやらせイベントに陥りがちな発表会だけに、プロセス重視の原則は心しておかなければなりません。グループワークによる共感、協力、また時には切磋琢磨するような意識づけがあつて、継続的かつ教育的な取り組みとなります。そして、演じる人も、裏方も、観る人も、その空間全体で心地よい楽しさが共有できることが評価の視点です。

みんなでつくるから多彩になる

福岡県春日市の児童厚生員グループは、方

言のかけ合いと落ちがおもしろい「博多にわか」や絵本で遊ぶ「エンとケラとブン」などの演目を持って初登場。松山市中央児童センターはムーブメントに挑戦し、活動の引き出しを増やしました。以前の「劇フェス」がきっかけで「夢邪気」という子どもと大人の劇団をつくり活発に活動しています。地元から参加の大津市堅田児童館は、高学年を中心にスケッチブックパフォーマンスや舞台上での観せるゲームなどを持って来てくれました。京都市の児童厚生員で構成する「劇団もーいーかい」は、各種イベントなどですでに公演実績のあるグループですが、今回はうたとリーダーシシアターを一体化した「三匹のこぶた」などで楽しませてくれました。研修生として全国から集まった児童厚生員グループは、即興ともいえる数日間のワークショップで、オープニングとエンディングを飾る表現あそびを作り上げました。

ハードな研修は達成感もすごい！

「劇フェス」が地域限定のイベントとならないように、全国規模の表現活動研修会をぶつけてみました。研修の内容が盛りだくさんなプログラムであったことは言うまでもありませんが、これには3つの大きなねらいがありました。

(1) 舞台・装飾・客席・音響・照明などのバックステージの理論と実技

(2) オープニング・エンディングをつくるためのソフト面での理論と実技

(3) イベント開催のための準備と運営のノウハウ

かなづちを手に角材やコンパネで舞台づくり、グループガンに持ち替えての看板の装飾、客席づくりや客入れ客出しの実際、短時間でのオープニング・エンディングのプログラムづくり。まさに研修生の皆さんが丁々発止の大活躍で、手作りフェスティバルを成功へと導いてくれました。とにかく義理で来たとか仕事と割り切れるような研修ではなかったことは確かです。そして、その対価となる達成感もすごいものだったことでしょう。

合言葉は「うっほ うっほ」

実際1日程度で仕上げなければならなかったオープニングとエンディングの稽古は、特に大変だったと思います。自分を表現することにとまどう人や寝言でセリフを唱える人がでる有様で、びわ湖への人水者を出さなかったことは幸いでした。期間中の研修生の合言葉は「いっぱいいっぱい」「いっぱいいっぱい」。朝晩のあいさつ代わりになっていました。それは肉体的・精神的疲れのピークを表すとともに、それぞれ戻ってからの課題として、またこの研修での成果として、口に見えないおみやげの質量を言い表す言葉でもありました。

とにかくやってみれば…

「劇フェス」は、(財)麒麟福祉財団の児童館活動に対するご理解あつての事業です。また今回の会場となったびわ湖こどもの国や滋賀県児連など、関係各位の協力なく実施することは不可能でした。文末ながらここに感謝と敬意を表します。おそらく来年も実施されるでしょう。「やってみたいなあ」と思った方も少なくないと思いますが、とにかくその気になった子どもや職員さんがいるときに、思い切って手を挙げてみればいかがでしょうか。忙しくはなくても、決して損することはありませんから…。



▲ オープニングの練習をする研修生。「ムズムズする熱い想い〜♪」